

浅野建二 著

日本の民謡



岩波新書

594



浅野建二著

日本の民謡

岩波新書

594

浅野建二

1915年仙台市に生まれる

1941年東京文理科大学国語学・国文学科卒

専攻—日本歌謡史

現在—山形大学教授

著書—「中世近世歌謡集」「日本民謡集」

「わらべうた」(以上共著, 岩波書店)

「日本歌謡の研究」「中世歌謡」

「閑吟集研究大成」「日本歌謡の

発生と展開」「新訂中世歌謡集」

「日本庶民文化史料集成」(第5巻歌謡)

日本の民謡

岩波新書(青版) 594

1960年5月20日 第1刷発行 ㊟

1975年1月20日 第5刷発行



著 者 あさ の けん じ
浅 野 建 二

東京都千代田区一ツ橋2-5-5

発 行 者 岩 波 雄 二 郎

長 野 市 中 御 所 2 - 3 0

印 刷 者 田 中 忠

発 行 所 東京都千代田区 株式会社 岩 波 書 店
一ツ橋 2-5-5

落丁本・乱丁本はお取替いたします

大日本法令 印刷・製本

はしがき

先年わたしは町田嘉章さんと一しょに『日本民謡集』（岩波文庫）を編んだ。それには全国から代表的な伝承民謡と思われるもの約二二五編をえらび、その一曲一曲にかなり詳しい注釈と解説を加えたが、戦後の民謡ブームに迎えられたせいも、今なお多くの読者に親しまれている。

わたしたちの意図した民謡集は、まずテキストとして信頼し得られるような正確なものに仕上げる点に最大の努力が払われた。そのために既刊の文献資料を隈なく渉猟し、能う限り現地録音のテープに合わせて自らも歌い正してみるといふ努力を積み重ねながら編纂に当った。その結果は、やや専門的に過ぎるといふ批評もあったようであるが、またそれだけに昭和の民謡集として定本的な性格を具え得たものと確く信じている。

このたび『日本民謡集』の姉妹書ともいうべき『日本の民謡』をまとめる機会を与えられたのは、わたしにとって当然果たさねばならぬ責務でもあり、まことに喜びに堪えない。『日本民謡集』を民謡のヨコの分布図を鳥瞰するために不可欠の書とするならば、本書は主として民謡の形成・発達の過程など、いわゆるタテの関係を多角的に考察しようと試みたもので、そこ

に自ら近代民謡に対する考えなり批判というものが生まれるように構想したつもりである。最近この種の刊行物も相次いで出ているが、ともすれば著者の好みに偏し、必ずしも日本民謡の全分野にわたって巨視的に記述したものとばかり言い難いように思われるので、わたしは、あくまで歌謡史専攻の立場から——むろん音楽性の問題も含めて——近代民謡を正しく把握し、日本民謡の特質を究明してみようとつとめた。上述の『日本民謡集』と併読していただければ幸いである。

本書を書くために用いた直接の資料は、故藤田徳太郎・故柳田国男・町田佳声（嘉章）・武田忠一郎の諸先学の研究に負うところが多いが、特に民謡の録音調査のため種々御便宜を与えられたNHK音楽資料課の職員諸氏、並びに各地方放送局部員の御厚意も忘れ難い。曲譜については町田さんの他、山形大学の熊田為宏氏をわずらわし、協同で作成した。さらに『日本民謡集』以来、始終鞭撻を加えていただいた岩波書店の高草茂氏にも重ねて深謝の意を表したいと思う。

一九六六年四月

浅野建二

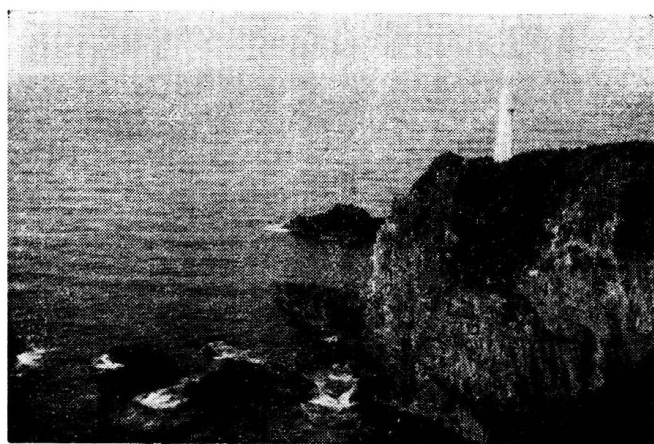
目 次

はしがき

I	民謡をたずねて	1
II	民謡とは何か	31
III	民謡にはどういふものがあるか	45
IV	民謡の発生とその歴史	63
V	詞型について	105
VI	音楽としての民謡	139
VII	民謡は移動する	153
VIII	労作唄と盆踊唄	169
IX	民謡は心のふるさと	203

歌名索引

I
民謡をたずねて



足 摺 岬

民謡のふ
るさと

上 ^{うへ} 見れば	虫 ^{むし} コ
中 ^{なか} 見れば	綿 ^{わた} コ
下 ^{した} 見れば	雪 ^{ゆき} コ

(秋田)

本州の北のはて「みちのく」といえば、誰でもまず雪国を連想するにちがいない。東北地方の空を灰色のヴェールにつつま、やがて白一色の世界に長い蟄居生活を余儀なくさせる冬將軍の到来を、東北の子どもたちは、かように豊かな詩情と限りない夢をもって美しく歌いあげている。雪の降るさまを眺めながら、上の方の雪は虫に見え、中ほどの雪は綿のように、そして下の方だけはハッキリ雪そのものに見えると歌う、この北国のわらべ唄には、その見事な写生に深くわたくしたちの心を打つものがある。

戦前、ドイツの建築学者ブルーノ・タウトが絶賛したように、秋田地方には子どもたちの冬の遊びとして、「かまくら」というものがあり、子どもたちは、正月の夜の行事として「かまくら」(雪室)の中に水神様を祀り、ローソクをともし、餅を焼いたり甘酒をのんだりして楽しむ。それは、きわめて素朴なものだが、あたかも西洋のクリスマスにも似た雪中の静かな祝祭である。何といっても東北の正月風景に、雪はなくてはならない美しい風物の一つといふべきで

あろう。

子どもたちが「かまくら」を作ったり、雪坂をこしらえて雪遊びに夢中になっている頃から、農山村の人々は、早くも年の豊作を祈念するいろいろの伝統的な民俗行事を重ねていく。七草ななくさの行事もその一つで、まず正月七日に七種の新菜を羹あつもの（あつもの）として食べると万病を除くという中国の古俗に習い、芹・なずな・御形ごぎよう・はこべら・仏の座はとけ・すずな・すずしろの七草を刻んで粥に入れる。この春の新菜を俎まないた（まないた）の上に置き、杓子や火箸・すりこ木、または庖丁などで俎を叩きながら唱えるのが、いわゆる「七草の唄」である。正月六日の夜から七日の未明にかけて、

たんたんはたき、たらはたき、唐土とんどの鳥が渡らぬ先に、たんたんはたき、たらはたき。

（秋田）

せんたら叩き、たら叩き、唐土とんどの鳥と田舎の鳥と、渡らぬさきの、たら叩き、たら叩き。

（山形）

というリズムカルな唄声が、雪に埋もれた静かな片山里の家々から流れてくる風情は、いかにも正月らしく、平和な気分にみちて興趣ふかいものがある。この行事も俗説には、中国で鬼車鳥という悪い鳥の翔るのを憎んだことから来ていると言われるが、本来の意味は、やはり鳥追いで、年の初めに作物の害敵である鳥を追って、豊年の予祝を行なう行事らしい。普通、正月

十五日を中心とする前後三日間ぐらい、早晩または晩に、板きれを棒の先で叩いたり、木片を拍子木のように鳴らしたりして、賑やかに田圃を騒ぎまわる、いわゆる鳥追い行事は、信州辺から関東・東北にかけて多い小正月行事だが、この時も子どもたちは大声で次のような唄を歌いながら、賑やかにはやしたてる。

早稲の鳥もホイホイ、中稲の鳥もホイホイ、晩稲の鳥もホイホイ、物食う鳥をば頭を割って、塩つけて籠に入れて、からがいて、(繩デシバツテ)遠島に追ってやれ、遠島にも隙はない、蝦夷^{えぞ}ア島に追ってやれ、蝦夷^{えぞ}ア島にも隙はない、鬼ヶ島に追ってやれ、ホーイホーイ。

(岩手)

この他に東北の各地には、田遊びの風流化された「田植踊」または「えんぶり」と称するものがあつて、大抵、小正月前後に、招かれた民家の一問や、場合によつては庭先などで演じられる。普通、弥十郎^{やんじろう}と呼ばれる子役の進行により、花笠をつけ、ササラや扇や鈴をもった数人の早乙女たちが、種蒔きから収穫に至る所作を舞踊化して演ずるもので、やはり農家の予祝行事の一つである。むろん、中には種々の踊唄や、民謡の類も豊富に聴かれる。

やがて雪の中から黄色のマンサク花が垣間^{かきま}見られる頃になると、雪深い東北にも春の訪れの間近いことが知られ、農民たちは一日一日、春の農作業の準備に追われる。野山に入ってシオデやホ菜・シドケなどの山菜を摘みに行く若い男女の歌う「ひでこ節」がのどかに聞こえてく

るのも、晩春から初夏にかけて多い。

へ十七八コナー 今朝のナー 若草 何処で刈ったナーコノヒーデコナー へ何処で刈ったナー

日干ナー 長嶺の 其の下でナーコノヒーデコナー へ其の下でナー ぐずのナー 若萌え

葉広草ナーコノヒーデコナー へ葉広草ナー 馬にナー つければ ゆさゆさとナーコノヒーデコ

ナー へゆさゆさとナー 馬屋にナー おろせば みな黄金ナーコノヒーデコナー へみな黄

金ナー うちのナー 御亭主は 出てはめるナーコノヒーデコナー (秋田)

ところで、ヒデコというのはシオデ(牛尾菜)という百合科の食用植物で、これに東北特有方言のコが附いて、シオデコ→シヨデコ、それが訛ってヒデコとなったものである。岩手県下閉伊郡地方では、これをソンドコまたはソデコ、山形県置賜地方ではシヨンドコまたはシヨンドコイといって共通の唄があるが、もともとソデコ(岩手)が元で、シヨデコ(秋田)となり、シヨンドコ(山形)と変化したものらしい。たとえば「ひでこ節」の中に「日干長嶺」という地名が出ているが、これは岩手県下閉伊郡小川村にある烏帽子長嶺という山の名を訛ったものと思われる。ともあれ、若い娘たちの楽しいロマンスの唄であるだけに、聴けば聴くほど素朴のうちに甘い美しい唄である。「津軽山唄」の

へ十五七が 沢をのぼりに 独活の芽かいた うどのしろめ(佳香ノアル嫩茎)を 食いそめた

という歌にも、同じ季節の唄らしさが感じられよう。

一般に東北では、（表日本の海岸地帯を除けば）根雪の期間が長く、短い夏と長い冬が特徴的であるといわれるが、それだけにまた、四、五月になると空は急に晴れて暖かい日がつづき、ウメ・モモ・サクラなどの百花が一時に咲き乱れ、農山村もあざやかな活気を呈する。田植え前に行なわれる、もっとも労働のはげしい代かき作業が始まる頃になると、秋田地方では、紺がすりのオバコ（娘）が泥田の中に立ち働く可憐な美しい姿も見られる。田植えは、どこでもそうであるが、わけても稲作を主産業とする東北では、いちばんたいせつな農作業で、ある意味では、もっとも楽しい田園の饗宴でもある。五月の末から六月の半ばという快適の季節に、午前・午後各一回ずつ小昼と称する食事がでるし、田の畔にムシロを敷いたり板を敷いて、みんなで会食するという最高の楽しみもある。そんな時、青森県の津軽地方では、次のようなユ―モラスな田植唄も古くから歌われた。

春来れば 田堰小堰さ 水コア出る 泥鰯コ鰯コアセア 喜んで喜んで 海さ入ったナド
思うベアネ コーリヤ コーリヤ

夏来れば、田堰小堰コア 温くなる 泥鰯コ鰯コアセア 喜んで喜んで 湯コさ入ったナ
ど思うベアネ コーリヤ コーリヤ

この西津軽郡木造地方にだけ残っている珍しい田植唄には、本州の北のはてである「みちの

く特有の暗さとか孤独感というものが微塵もなく、全体に底抜けの明るさがみちているように思われる。それは全くふしぎなほどの明るさであるが、おしなべて津軽民謡には、きびしい自然とたたかい、貧しい生活に耐えてきた津軽人の土根性というものが根強く流れているような気がする。たとえば、

へ一つアエー 木造新田きづくりしんでんの下相野しもあいの 村の端はンずれコの弥三郎やしやぶろア家え ヤアリヤ弥三郎エー

へ二つアエー 二人と三人と人頼たので 大開おひらきの万九郎から嫁貰もらた ヤアリヤ弥三郎エー

へ三つアエー 三つ物揃ものえて貰みらた嫁 貰みらて見たどごア氣に合あわねエ ヤアリヤ弥三郎エー

へ十アエー 隣知らずの牡丹餅ぼたんコ 嫁ね食かせねで親子ばり ヤアリヤ弥三郎エー

——「弥三郎節」の一節——

この唄は文化五年（一八〇八）秋の頃、西津軽郡木造の隣村、森田村大字下相野の弥三郎という百姓に嫁いだ娘が、姑に虐待されて離縁になったという事件を、村の人が同情して、当時流行の数え唄式に歌い囃したもので、封建的な農村によくある嫁いびりの唄として有名であるが、その旋律は、暗いじめじめしたクドキ調とは違って、一抹の哀調をおびた中にも軽妙洒脱な明

るさをもっている。このことは「津軽よされ節」にも「津軽じょんから節」にもいい得ることで、とくに盆踊唄の例でいえば、古くから弘前地方に歌われている「ドダレバチ」などには、そうした意味における津軽独特の明るさというものが横溢していて、なかなか傑作のように思われる。

へドダバ　ドダレバチヤ　ダレバヅア孫だ（ホーイ　ホイホイ）　ドダバ　ドダラバチャー　サラ
バチヤ孫だ（ホーイ　ホイホイ）

へ高い山コから　田の中見れば　見れば田の中　稲アよくもでる（分蘖（ブンケツ）スル）

へドダバ家コ（か）の親父（おや）ア　雨降る中に　笠（かさ）もかぶらねで　簑（蓑）（か）コも着（き）ねで

へドダバそちのなみ（人名）　口（くち）無（な）エなドダバ　口（くち）も手もある　から骨（ほね）ア痛（いた）める（骨惜（ほねおし）ミスル）

津軽弁丸出しで歌うこの唄は、最初の文句から「ドダラバ」とか「ドダラバチ唄」とも呼ばれているが、歌意はすこぶる難解である。おそらく「どうしたんだい、どうした奴（やつ）だい、だれ婆（ば）さんの孫（まご）だい」という意味の文句を掛合式に歌ったものであろう。唄は短いが、すこぶる野趣（よそ）と気魄（きぱく）に富み、さばきがよくて津軽の人たちにピッタリとしたものを感じさせる。民謡のお

もしろさとか、民謡の味というものは、常にこのような風土性に直結したところからのみ生まれるものと思う。

伊予・土佐の旅

ところで昭和三十七年の夏、私ははじめて町田嘉章さんと一しょにNHK音楽資料課の民謡採集旅行に参加して、実際に愛媛県(中・南予地方)から高知県(幡西地方)の海岸地帯を行脚する機会に恵まれた。私

にとつては本当に願っても得られない好チャンスであった。何しろ四国山脈を越えて全行程約八〇〇キロメートルを走破するというのである。一行八名がNHK松山局の乗用車二台に分乗して松山市を出発したのは七月十八日の早朝であるが、中には最近『愛媛民謡集』の大著を完成された愛媛大学の和田茂樹氏も参加されているので地理不案内の私には何よりも心強かった。

第一日は上浮穴郡久万町―喜多郡内子町というコースで大洲市に泊ったのであるが、全行程は約一〇〇キロ。途中、



三坂峠 正岡子規詩碑

敲危小径晨を破って行く

松樹蕭森世情を絶つ

独り竹筩を停め首を廻らして望めば

白雲湧く処是れ松城

という正岡子規十五歳の時(明治十四年)の詩碑が建っている土佐街道の難所、三坂峠(七一九メートル)をはじめ、嶮岨な峠を二つも三つも越えた。大抵は公民館とか公会堂または役場の二階などに、あらかじめ参集していた演唱者に順々に歌ってもらい、それを次々と録音するのであるが、私と和田氏は歌詞の記録係を担当したので、ゆっくり鑑賞するというよりは、一語々々聴きもらすまいとペンを走らせるのに忙しかった。それでも時折、古調の歌詞を発見し得た時などは、思わず顔を見合わせてうなずき合い、歌い終った後で逆に「こんな歌詞は御存じないか」といった具合に演唱者に対して誘い水をかける始末であった。記録の要領は別に変ったこともないが、まず採集の日時・場所の外に、必ず演唱者からその曲名・氏名・住所・年齢・職業等を聞いて、大体の演唱順序をきめるのが一仕事。演唱者の平均年齢も六十五、六歳という故老が多かったが、中には一杯機嫌で勝手にリハーサルを始めているのや、「こんな唄は要らんかネ」などと唄の押売りをする者もあって少々面喰った。とにかく録音開始となればほとんど休みなしに次々とテープが回転し、そのまにまに歌詞や囃し詞を記録していくのであるから、

方言や訛音の多い土地の言葉を正しく写すことはなかなか容易でない。いわんや唄の由来や方言の注解などの仕事は、出来ればその場で解決するのが理想的であるが、いちいち現地の説明を記録する余裕のないことが多いため、その説明をもそのまま収録する場合がしばしばあった。

久万

久万町は、四国の最高峰、石槌山（二九八メートル）の西部、久万川に沿ってひろがっている久万高原の中心地で、附近は県内でもっとも山深く、焼き畑も多いが、また伊予紙の原料となるコウゾやミツマタの栽培の盛んなどところである。この最初の採集地では、菅生出身のM氏（63）が歌った、

へ馬よ歩けよエ 沓買うてヨはかそヨ 一足五文の安沓をヨ（ハイ）くく いくぞ ハイ いくぞ

へえらいものぞな 明神ヨ 馬子はヨ 三坂夜で往て 夜で戻るヨ

へわしが若い時ア 小田まで通うたヨ 小田の河原で 夜が明けたヨ

へ三坂通いすりや 雪降りかかるヨ 戻りや妻子が 泣きかかるヨ

という「馬子唄」が実に印象的であった。小田というのは上浮内郡内の地名であるが、この唄を聴いた瞬間、今しがた越えて来たばかりの三坂・明神の両峠からの展望が思わず眼底に浮かび、藩政時代の交通難もそぞろ偲ばれた。一番最後に歌った「三坂通いすりや……」の文句も